

大鳥紀行

SL

1985

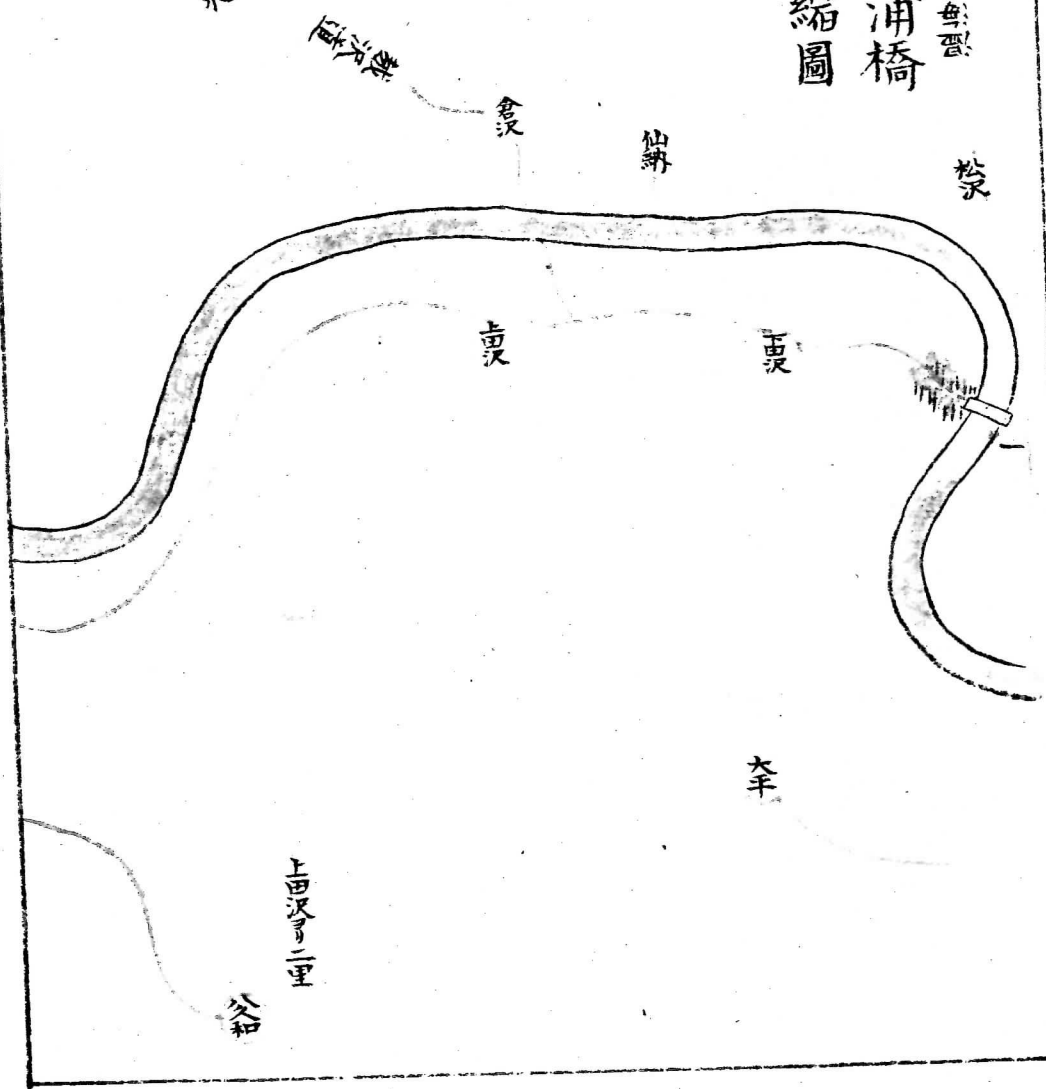
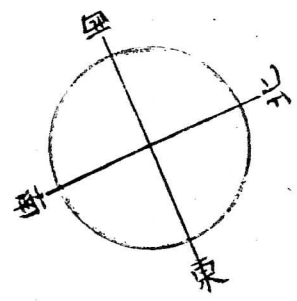
大鳥紀行序

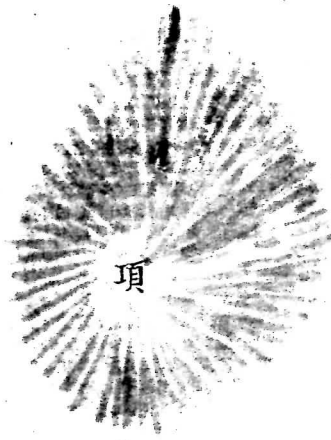
浄閑正綱今回大鳥に赴く息男直綱猶子胤
保其の帰来を待受とて此行の始終を訊ふ言ふ
其の詳細とていふに衆之不同とて紀行を終と其
中の勝景より多くは昔画と圖とて見せ給へと請ふ
に其を辭せ給へと爲る一篇と記す以て
是の言ふは實也

庚辰八月

分間番三憑テ尾浦橋
 以南槩畧推量縮圖
 四面皆山地

聖川無雲





頂

摩耶山

國川

海峽

番

六

五

山崎

四

荒沢

三

二

南

北

東

西

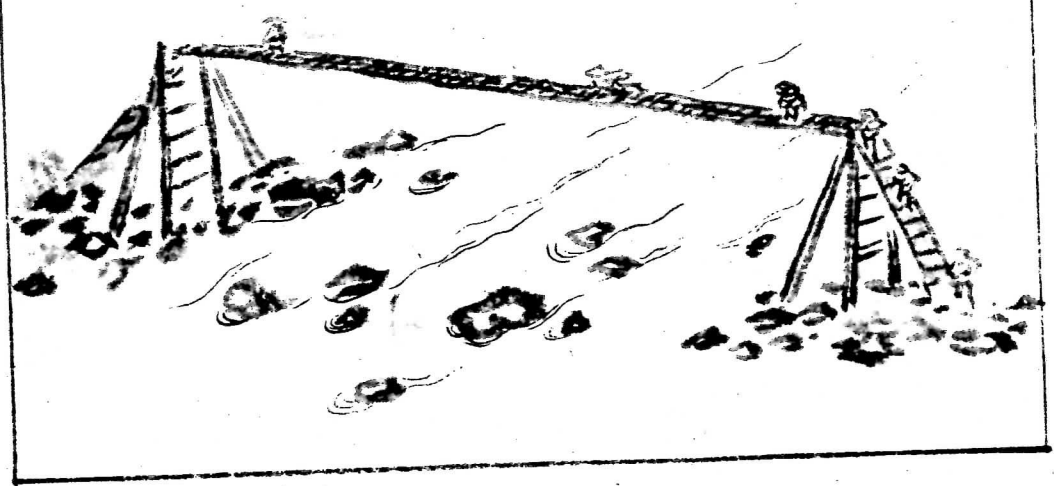
大鳥池
豎拾九丁五十間
横二拾四丁三十間
右天和寺中雪之上量之上見

東田郡後所
十四里余
米倉
戸數六十七

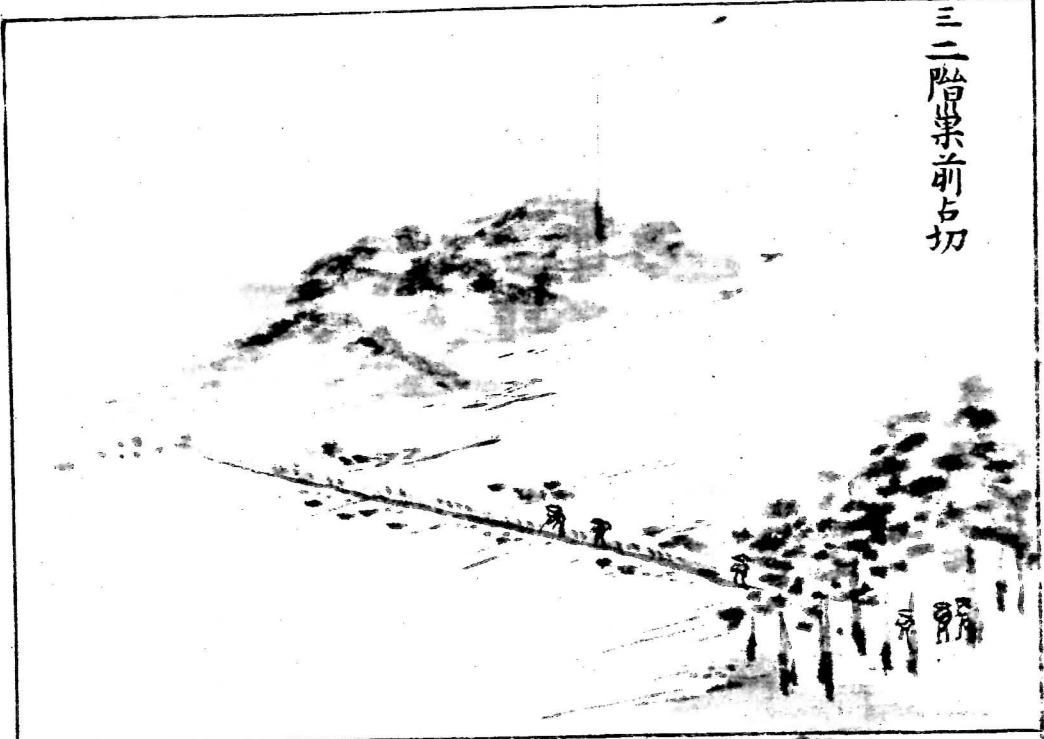
山中六景之内
 一 尾浦橋
 長廿五間三尺八寸六分
 水迫十三尋



二 荒沢箴橋



三階景前占切



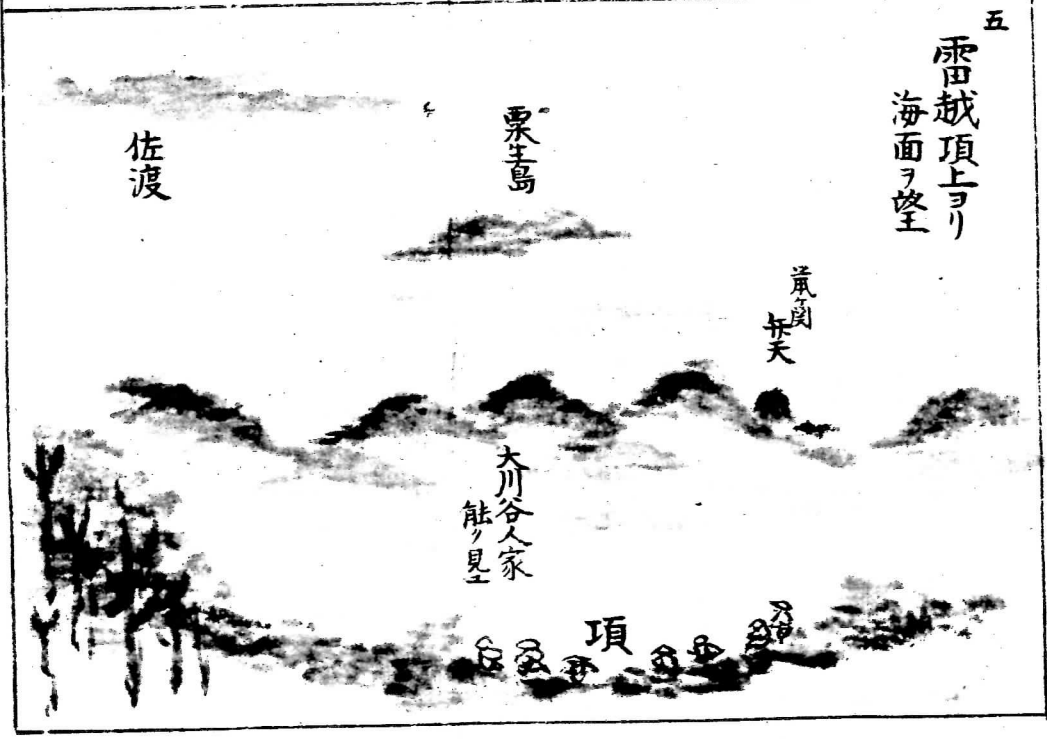
四一之股山中黒瀧



六
摩耶山三方倉



五
雷越頂上り
海面ヲ望



佐渡

粟生島

嵐園
并天

大川谷人家
能ク見

頂

大鳥紀行

當國東田川郡の南隅に在る所の大鳥の池と云ふ所を
とく人の至り具ぬ界の事と云ふ所はとく具果と云ふ同
志と暮り各糧料と用意し明治十三年庚辰七月十日
午前八時を駈し多と多に其人負ひ池田町を過り工藤良
斎の島寺を渡部千明神花の上野藤を所工藤より従者
助藏合せて六頁東大鳥と差し登り程ふ午後七時より
此小多と至り着ぬ豫し郡の書記所より長澤氏と彼

所の村民等も渴びを憐れ移りて入りて彼人より一
翰と乞請く爰に首立とて半三郎且十席とて
然し今晚一泊の宿を頼み次は明日池に集りて業内の人
と取斗はん様度と云ふ事猶書中より申す事
御と差出し及暫く半三郎の事と申す事
祠堂の御系とて此の如き事と申す事
先や角一者も此の如き事と申す事
事と申す事

正に此れをくも連らるへくもはく金成旺お仰ふ言ふ何ぞ
のさとのふまきおの船はせくも尋ふ人まうく池を捉ひしる池
廣狭浅深と測量しはくはるまう神の忌と嫌はれた
所中くも忽ち風雨を起し水と増んまうまあ此を下の田畠
近々まあゆくも幾子刈の地とまひくはく種く種は
忘れと記の傍うやうくはくを摩くくはく今に秘遠し
如何じん回道の嶋並おはくふくもはくもさくたごりり
災害を應はくはく端くはく池の粒はくはく思ひ共

おん責めをいふ今晩一泊の志をいはずし住りて入りし
池と思ひ昔と云ふお堅き心は我れは心覚えしとせいか
養蚕の如くもいふ見苦なりともお承はらん六匹
の糸は易い事といふ頃堂は此の爲に申す工藤と自然
なると励ましきるまかりしをいふ堅き心と云ふ
鰯指を信し心算をいふとて心違ふ事とて心在りし
中は夜ふく羊三節降周よりお阿ナクハ西田川
郡長友の取親父と承りぬ此のりの推定書に其

後所の庇蔭と云ふ事年生少くはと道六首三の者
月日貴元の邂逅と告げし事不果しく染字P
いゝもふーPと道六くさういひぬる川持くそ方
と急めをまゐるふく邂逅と伝ふくPといふ方
此道なる事くPといふ

抑此田澤山中の村くふ田家の名跡多し事と善く
人の知し取し此半之師と云藤と稱し其の射祐経の
次男の氣く後良を妻に即此支流く少や道六傳其の

古器といひ洋器を律と道とく之をわたり我高小社相合
 少もそのとより名取一様と拂ひ甚と被ひく其開り
 半斗半の陶器一斗と取出一是取人先祖祐臣の右
 大将家より賜ふ所の神酒壺と云傳ふ一畝の月一斗培流
 の伊東家傳ふ日向の具よりく取傳ふ一畝の月一斗培流
 倫も焼の如き此紫黒の陶器とくその口ハ欠損とく全破ラ
 具へと色も甚下赤と之浦と物出りた

昨日と日五 朝より酒よ送よと人々集きてぬき肉の連通し

即池の下流大石川と沂々事十二丁ふ〜〜を陽西と
す〜川一方と事ハせき寒ひ〜水勢と控キ大石川と
岩池の船と船と投細〜〜獲る所之難の如キ大石
形と獲る〜〜を辨當と氣中〜は南岸と突出
律へ〜三巖より我道不ぬ〜〜の如キ平ラニ大石
岩より見立岩と云ふ御流の流源亦而〜他
岩鐵とあり紋と結ハ淵と巻ふたを森と〜石
生いふ〜日光と〜風冷〜〜七月の天